

染井霊園と桜

児玉 寛嗣

めっきり春らしくなったある日、霊園を訪れた。駒込駅を目指して歩き、駅からは染井通りを十分ほど行くと霊園に辿りつく。霊園の遊歩道に植えられた桜並木では、花の蕾が早く咲きたいと言っているように感じた。桜、ソメイヨシノはここが本場だと自慢げに見える。

この辺りには江戸時代、大名屋敷の庭園を管理する植木屋が集まっていた。植木屋の間では庭園に植えるための新しい品種の庭木や草花の開発競争が盛んだった。ソメイヨシノも開発競争の結果、生まれたもののようだ。最近の遺伝子研究によるとオオシマザクラとエドヒガンの交雑品種を起源として、接ぎ木、挿し木によつて全国に広まったとのことだ。当初は有名な「吉野の桜」のブランド名を借りて「吉野桜」として売り出していた。明治以降、全国に広まったが、名前は「ソメイヨシノ」。桜で有名な吉野山からクレームがついたのかもしれない。

吉野山のヤマザクラだが、歴史は奈良時代までに遡る。吉野は神仙の住む理想郷と考えられていた。修験者が山奥に深く分け入り、長い月日の難行苦行ののち、蔵王権現を感得し、その尊像こそ民衆を救うものだとして像を桜の木に刻み、山上ヶ岳と吉野山に祀ったとされている。その後、修験道が盛んになるにつれて本尊を刻んだ「桜」こそ「御神木」とされた。これでは江戸時代を起源とするソメイヨシノは頭が上がりないはずだ。

話は戻って霊園だが、谷中霊園などと同じく明治初期に東京府の墓地として設けられたもので、江戸時代は播州の林田藩の屋敷があったそうだ。この藩は姫路市内にあつて、一万石の城も持たない小藩だ。そのような藩でも広大な土地を与えられていたのには少なからず驚いた。霊園には著名人も多く眠っている。谷中に住んでいた高村光雲・光太郎親子が谷中霊園でなくここに葬られているのは奇異に感じたが、近くに岡倉天心も眠っていたので合点がいった。

今年の花見は染井霊園に決めた。開花が待ち遠しい。